こんなんしてます。

わだいのしごと

87

くるくるくまの

f分の1ゆらぎ

「f分の1（エフぶんのいち）ゆらぎ」という言葉が20年ほど前に流行しました。科学的な根拠は分かりませんが、風のそよぎや川のせせらぎ、ろうそくの炎など自然現象の中に発見されたもので、快感や安らぎを与えるものとして注目されました。先日、そのことを思い出しました。

和歌山大学が那智勝浦町高津気で地域の若者や住民の方、学生らと取り組んでいる小水力発電装置の公開運転実験を行いました。水利組合の了解を得て水路の堰（せき）を開けると、水車が勢いをつけて回転。この季節、熊野の水はとても豊かで清涼です。水車は直径3㍍の上掛け水車。ザブン、ザブンと水をためた水車が回り始めると、さっきまでにぎやかに、電灯をつけたり掃除機を回したりと発電された電気利用の実験を行っていた皆が、そのうちに一様に黙ったままじっと立ち尽くし、ただ回る水車と水を見つめ続けているのです。水車の音だけが聞こえるひとときの静寂…。

川から流れる水の音も、学生や大工見習いの若者が試行錯誤しながら作った水車も、精巧、精緻とは対極のものです。水に濡れたスギ材も、見方によっては少し「不細工」なところも実に「いい味」を出しているのです。f分の1のゆらぎとは、正確に規則正しい繰り返しと不規則なノイズの中間のものとされ、音だけではなく、視覚でも、たとえば直線的なビルや一分の狂いもなく大量生産された工業製品には存在せず、伝統的な木造家屋や手づくりのものには存在するとのこと。つまり、自然のリズム、呼吸の中で、調和しながら居ることの心地よさなのです。手づくりの水車が奏でるリズムは、平和でのどかな時間と空間を集まった皆の心に与えてくれました。

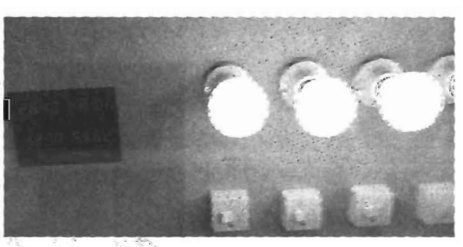
回り始めた発電水車

富と幸福の循環

水車といえば、ノスタルジーを呼び起こすものとして表現されがちです。しかしここではもっと戦略的です。いまの時代、ノスタルジーではご飯は食べられないのですから。高津気地区に農村集落調査のために入ったのが2010年。その後、水車再生、水車小屋再生、発電装置設置と大工さんや工務店さんのご指導をいただきながら、昭和初期に精米、精麦、製材まで行っていた水車と水車小屋作製の追体験をしながらこの日に至りました。平成のいま、水車発電は、生活の楽しさや豊かさを生み出す原動力になるはずです。

この水車小屋は若者の発案で「くるくるくまの」と名付けられました。自然の水からエネルギーが生まれ、そのエネルギーが地域の生産活動の一助となり、生活に豊かさをもたらす。水から生まれた経済が、くるくる地域を回り生活の満足を高めるだろう、という深い意味を持っています。富と幸福の地域内循環です。

この水車プログラムに積極的に参加した新谷君が「くるくるくまの」の表札を墨で書きました。板は廃材。お習字はうまくない新谷君の字が、廃材の木目に映えています。字と木目の「ゆがみ」こそ手づくりの「ゆらぎ」。快感と幸福をもたらす地域の資源とそれに歩み寄ろうとしている「ひと」の魅力を発見した一日でした。



水車発電で点灯

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター　教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。